

古貉

泉鏡花作

全一章

「しゃツ、しゃツ、しゃあつ！……」

寄席の入らつしやいのやうに聞こえるが、これは、  
いざ／＼、いでや、と言ふほどの勢ひの掛聲と思へ  
ば可い。

「しゃあつ！ 八貫 ー ー ウん、八貫、八貫、  
八貫と十ウ、九貫か、九貫と十ウだ、……十  
貫」！

目の下およそ八寸ばかり、濡色の鯛を一枚、しる  
し半纏といふ處を、めくら縞の筒袖を両方大肌脱ぎ、  
毛だらけの胸へ、釣身に取つて、尾を空に、向願卷  
の結びめと一所に、揺々と刎ねさせながら、掛聲で  
其の量を増すやうに、魚の頭を、下腹から膝頭へ、  
じり／＼と下ろして行くが、

「しゃツ、しゃツ。」

と、腰を切つて、胸を反らすと、再び尾から頭へ、

じり／＼と響を打たして釣下げる。これ、値を上げる寸法で。

「しゃツ、十貫十ウ、十貫二百、三百、三百ウ。」

親仁の面は朱を灌いで、其の物は蛸の如く、魚の鰭は萌黄に光った。

「力に入るね、尾を取つて頭を下げ下げ、段々に糶るのは、底力が入るが、見て居て險氣だね。」

と黒い外套を着た男が、同伴の、意氣で優容の圓鬚に、低聲で云つた。

「さう。でも大鯛をせるのには、何處でもあゝするのぢやアありません？・・・」

人だちの背後から覗いて居たのが、連立つて歩き出して、

「・・・と言はれると、第一、東京の魚河岸の様子もよく知らないで、お恥かしいよ。ー

こゝで言つては唐突で、些と飛離れて居るけれど、松江だね、出雲の・・・茶町と云ふ旅館間近

の市場で見たのは反対だつけ　――　今の・・・

・  
「

外套の袖を手で掲げて、

「十貫、百と糶上げるのに、尾を下にして、頭を上へ上へと上げる。・・・景氣もよし、見て居るうちに値が出来たが、よう、と言ふと、それ、其の鯛を目の上へ差上げて、人の頭越しに翻然と投げる。――　處をすかさず受取るんだ、よう、と云つて後の方で。・・・威勢がいゝ。それで居て、腰の矢立は此處のも同じだが、紺の鯉口に、仲仕とかのするやうな廣い前掛を捲いて、お花見手拭のやうに新しいのを頸に掛けた處なぞは、お國がら、まことに大どかなものだつたよ。」

「陽氣ね、それは。・・・でも、此處は近頃の新聞ですもの。お魚はほんのついたりで、おもに精進ものの取引をするんですよ。然ういつては、十貫十ウの、いまの親仁に叱られるかも知れないけれど、皆が蓮根市場といふくらゐなんですわ。」

「成程、大きに。――然も其の實、お前さん  
と……むかしの蓮池を見に、寄道をしたんだ  
つけ。  
と、外套は、洋杖も持たない腕を組んだ。」

話の中には――此の男が外套を脱ぐ必要もな  
ささうだから、いけぞんざいだけでも、懇意づく、  
御免をかうむつて、外套氏として置く。たゞ旅客で  
も構はない。

が、私の此の旅客は、實は久しぶりの歸省者であ  
つた。以前にも兩三度聞いた――渠の歸省談の  
中の同伴は、其の容色よしの従姉なのであるが、従  
姉は生憎京の本山へ參詣の留守で、いま一所なのは、  
お町といふ其の娘……といつても一度縁着い  
た出戻りの二十七八。で、親まさりの別嬪が冴返つ  
て冬空に麗かである。それでも、何處かひけめのあ  
る身の、縞のおめしも、一層なやかに、羽織の肩  
も細りとして、抱込んでやりたいほど、いとしらし  
い風俗である。けれども家業柄――家業は、土  
地の東の廓で――近頃は酒場か、カフェーの經

「營だと、話すのに幅が利くが、困った事にはお茶屋、所謂おん待合だから、些と申憎い、が、仕方がない。其だけにまた娘の、世馴れて、人見知りをしてない様子は、以下の舉動で追々に知れようと思ふ。」

「丁度いゝ。歸省者も故郷へ錦ではない。仍て件の古外套で、映畫の臺本や、仕入ものの大衆向で、どうにか世渡りをして居るのであるから。」

「陽氣も陽氣だし、それに、山に包まれて居るんぢやない、其の市場のすぐ見通しが、大きな湖だよ、あの、有名な穴道湖さ。」

「あら、山の中だつて、をぢさん、こちらにも、海も、湖も、大きなのがありますわ。」

「湖は知らず、海に小さなのと言つては斷じてあるまい。何しろ、話だけでも東京が好きで、珍らしく土地自慢をしない娘も、對手が地方だけに、一寸反感を持つたらしい。」

「いかにも、湖は晃々と見える。が、水が蒼穹に高

い處ところに光ひかりつて居ゐる。近い山やまも、町まちの中央ちゅうおうの城しろと向合むきあつた正面しょうめんとは違ちがひ、場末ばすゑの此この邊あたりは、麓ふもとの迫せまる裾すそに成なり、遠山とほやまは波濤はたうの如ごとく累かさなつても、奥おくは時雨しぐれの濃こい雲くもの、次第しだいに霧きりに薄うすくなつて、眉まゆは迫せまつた、すゝき尾花おぼなの山やまの端はは、巨おほきな猪いのしの横よこに寝ねた態さまに似にた、其その猪いのしの鼻はなと言いはう、中空なかぞらに抽出ぬきんでた、牙きはの白しろいのは湖みづうみである。丘をかを隔へだてて、一條青ひとすぢあをいのは海うみである。

其その水みづの光ひかりは、足許あしもとの地つちに影かげを映射うつして、羽織はおりの栗梅くりつめが明あかるく澄すみ、袖そでの飛模とびも様やうも千鳥ちどりに見みえる。見みると、やゝ立離たちひなれた。――一段高いちだんたかく臺だいを踏ふんで立たつた。――糶賣せりうりの親仁おやぢは、此この小春日こはるびの眞中まんなかに、然しかも夕月ゆふづきを肩かたに掛かけた銅像どうざうに似にて居ゐた。

「あの煙突えんとつが邪魔じやまだな。」

此處こゝを入はいつて行きませうと、同伴どうはんが言いふ、私設しせつの市場いちばの入口いりぐちで、外套ぐわいたうし氏は振返ふりかへつて、其その猪いのしの鼻はなの山やま裾すそを仰あふいで言いつた。

「あれ、温泉をんせんよ。」

「温泉をんせん？」

「いま通とほつて來きたぢやありませんか、をぢさん。」

「あゝ、あの紺屋の物干場と向ひ合つた．．．．．  
蟋蟀がないて居た．．．．．」

蟋蟀は．．．．．こゝでも鳴く。

「其の紺屋だつて、あつたのは昔ですわ。垣も何にもなくなつて、いまは草場でしたわね。」

「然うだつけな——實は、あのならびに一人、おなじ小学校の組の友だちが居てね。．．．．八田なにがし．．．．．」

「其のお飯粒で蛙を釣つて遊んだつて、御執心の、蓮池の邸の方とは違ふんですか。」

鯛はまだ値が出来ない。山の端の薄に願巻を突合せて、あの親仁は又反つた。

「違ふんだよ。．．．．何も更めて名のるほどの事もないんだけど、子供ツて妙なもので、まはりに田があるから、あゝ八田だ、それにしても八ツはない。．．．．そんなことを獨り合點した事も思出してをかしいし、餘り様子が變つて居るので、心細いやうにもなつて、つい浮かりして——活

動寫眞の小屋が出来た・・・がらんとして居る、不景氣だな、ときよつとして、何、晝間は休みなのだらう、にしておいたよ。然う言へば煙突も眞正面で、却つて、あんなに高く見えなかつたもんだから、明取りかと思つたつけ・・・映畫の明取りは些と變だね。何うかして居る。」

と笑ひながら、

「然うかい、温泉かい・・・こんな處に。」

「沸すんですよ・・・たゞの水を。」

「たゞの水はよかつた、成程。」

「でも、温泉といった方が景氣がいゝからですわ。

そしてね、をぢさん、いまの、あれ、貉の湯つてい

ふんですよ。」

「貉の湯？・・・」

と同伴の顔を見た時は、もう其の市場の裡を半ば過ぎて居た。まだ新しく、ほんの假設らしい、通抜けで、たゞ兩側に店が並んだが、二三個處うつろに穴があいて、何故か筆笥の抽斗の一つ足りないやうな氣がする。今來た入口に、下駄屋と駄菓子屋が向合つて、駄菓子屋に、ふかし芋と、茹でた豌豆を賣

るのも、下駄屋の前ならびに、子供の履ものの目立つて紅いのも、もの佗しい。蒟弱の桶に、鮎のバケツが並び、鱧の笊に、天秤を立掛けたまゝの魚屋の裏羽目からは、あなめあなめ空地の尾花が覗いて居る……と云つた形。

「ー あとで地の理をよく思ふと、此處が昔の蓮池の口もとだつたのださうである。ー

「皆其の御眷屬が賣つてるやうだ。」

「何？ をぢさん。」

「いえね、其の貉の湯の。」

「あら聞こえると悪ござんすわ。」

とたしなめる目づかひが、つい横の酒類販賣店の壇に、瞳が蝶のやうにちらりと映つて、レットルの櫻に白い頬がほんのりする。

「決して悪く云つたのぢやない。……これで地口行燈が五つ六つあつてごらん。ー 横露地の初午ぢやないか。お祭のやうだと祝つたんだ

「よ。」

「そんな事……お祭だなんのといつて、一口飲みたくなつたんぢやあ、ありません？ おつかさん（外套氏の従姉を言ふ）ならですけど、可厭よ、私、こんな處で、腰掛けて一杯なんぞ。」  
「大丈夫。いくら好きだつて、蕃椒では飲めないよ。」  
と言つた。

市場を出た處の、乾物屋と思ふ軒に、眞紅な蕃椒が夥多しい。……新開ながら老舗と見える。  
わかめ、あらめ、ひじきなど、磯の香も芬とした。  
が、それが時雨でも誘ひさうに、薄暗い店の天井は、輪にかゞつて、棒にして、揃へて掛けた、車麩で一杯であつた。

「見事なものだ。村芝居の天井に、雨車を仕掛けた形で、妙に陰氣だよ。」

串戲ではない。日向に颯と村雨が掛つた、薄の葉摺れの音を立てて。――げに北國の冬空や。

ふたり 二人は、一寸其の軒下へ入つたが、  
「すぐ晴れますわ、狐の嫁入よ。」  
といふ、斜に見える市場の裏羽目に添つて。紅蓼  
と、露草の枯れがれに咲いて残つたのが、どちらが  
其の狐火の小提灯だか、濡々と灯れて、尾花に戦いで  
……それ動いて行く。

「然うか、私はまた狐の絲工場かと思つた。雨あ  
しの白いのが、天井の車麩から、ずら／＼と降つて  
来るやうぢやあないか。」

「可厭、をぢさん。」  
と擦れるばかり、肩を寄せて、

「氣味が悪い。」

「ぢやあ、言直さう。こゝは蓮池のあとらしいし、  
この絲で曼陀羅が織れよう。」

「えゝ、だつて、極樂でも、地獄でも、其の絲が  
いけないの。」

「絲が不可いとは。」

「……だつて、椎の木婆さんが、絲車を廻  
す處ですもの、小豆洗ともいふんですわ。」

後前を見廻して、

「それはね、城のお殿様の御寵愛の、その姉さんだつたと言ひましてね。むかし、魔法を使ふやうに、よく祈りのきいた、美しい巫女が其處に居て、それが使つた猪だとも言ふんですがね。」

あなたは知らないのか、と聲さへ憚つてお町が言つた。――此の乾物屋と直角に向合つて、蓮根の問屋がある。土間を廣々と取り、奥を深く、森と暗い、大きな家で、こゝを蓮根市とも呼ぶのは、其の故だと言ふ。屋の棟を、うしろ下りに、山の中腹と思ふ位置に、一朵の黒雲の舞下つたやうなのが、年數を知らない椎の古木の梢である。大昔から、其の根に椎の樹婆叉といふのが居て、事々に異靈妖變を顯はす。徒然な時はいつも絲車を廻はして居るのださうである。もともと私どもの、此の旅客は、其の小學校友だちの邸あとを訪ふために來た。・・・其の時分には遊びに往來もしたらうものを、あの、椎の樹婆叉を知らないのかと、お町が更に怪しんで言ふのであつた。が、八ツや十ウのものを、故と親たちは威しもしまい。

近所に古猪の居

る事を、友だちは矜りはしなかつたに違ひない。

「町の名もそれから起つた。――然

うか、椎の木の大猪、經立ち猪、化婆婆。

「あれえ。」

「可厭、をぢさんは。」

「あやまつた、あやまつた。」

鐵砲で狙はれた川蝉のやうに、日のさす小雨を、綺麗な裾で蓮の根へ飛んで遁げた。お町の後から、外套氏は苦笑ひをしながら、其の蓮根問屋の土間へ追ひ續いて、

「決して威す氣で言つたんぢやあない。――はじめは蛇かと思つて、ぞつとしたつけ。」

椎の樹婆又の話を聞くうちに、ふと見ると、天井の車麩に搦んで、ちよろ／＼と首と尾が顯はれた。その上下に巻いて廻るのを、蛇が傳ふ、と見るとともに、車麩がくるくと動くやうで、因果車が畝つて

通る。……で悚氣としたが、熟と視ると、鼠か、溝鼠か、降る雨に、あくどく濡れて這つて居る。……時も時だし、や、小さな貉が天井へ、とうつかり饒舌つて、きれいな鳥を蓮池へ飛ばしたのであつた。

「そんな事に驚く奴があるものか。」

「だつて、……でも、もう大丈夫だわ、こゝ

へ来れば人間の狸が居るから。」

と、大きに蓮葉で、

「権ちゃん　――　居るの。」

獸ならば目が二つ光るだらう。あれでも人が居るかと思ふ。透かして見れば帳場があつて、其の奥から、大土間の内側を丸太で劃つた　――　（朝市が其處で立つ）　――　其の劃の外側を廻つて、右の権ちゃん　……　めくら縞の筒袖を懐手で突張つて、狸よりは膾膾に似て、ニタ／＼と顯はれた。廓の美人で顔がきく。此の権ちゃんが顯はれると、外土間に出張つた縁臺に腰を掛けるのに　――　市が立つと土足で糶上るのだからと、お町が手巾でよ

く拂はたいて、縁えん臺だいに腰こしを掛かけるのだから、ぢかに七輪しちりんの方がいほうゝ、そちこち、お八やっつ時じ分ぶん、薬やく罐わんの湯ゆも沸わいて居あようと、遙はるかな臺だい所ところ口くちから其その權ごんちゃんに持もつて來きさせて、御ご挨拶あいさつは澤たく山さん・・・大きな坊ぼうやは、かう見みえて人ひと見み知しりをするから、とくるりと權ごんちゃんに背うしろ後ごを向むかせて、手てで叩たたく眞ま似ねをすると、えへゝ、と權ごんちゃんの引ひ込こんだ工く合あひが、印いんは結むすばないが、姉ねえさんの妖えい術じゆつに魅かつたやうであつた。

通とほり雨あめは一ひと通とほり霽あがつたが、土つちは濡ぬれて、冷つめくて、翡翠かほせみの影かげが駒こま下まげ駄たを、辻すべつて又また映うつる・・・片ひ裄ひじま端はし折をに、乾かん物ぶつ屋やの軒のきを傳つたつて、紅べ端には緒なの草ざう履りではな  
いが、ついと樂が屋やく口ちへ行ゆく状さまに、肩かた細ほそく市いち場ばへ入はつたのが、やがて、片かた手にビールの壘びん、唯と見みると片かた手に持もつた硝コッ子ッ盃フが、光ひかりを分わけて、二ふたつになつて並ならんだのは、お町まちさんも、一ひと口くちつき合あつてくれる氣きか。  
「しやツ、しやツ。」

思おもはず糶せり聲こゑを立たてて、をぢさんは、手てを揚あげながら、片かた手てで外くわ套いたうの膝ひざを叩たたいた。

「お手柄てがら、お手柄てがら。」

土間は忽ち春になり、花の蕾の一輪を、朧夜にす  
かす如く、お町の唇をビイルで撓めて、飲むはどに、  
蓮池のむかしを訪ふ身には本懐とも言へるであらう。  
根を掘上げたばかりと思ふ、見事な蓮根が柵の内、  
浄土の逆茂木。勿體ないが、五百羅漢の御腕を、組  
違へて揃ふ中に、大策に慈姑が二杯。泥のまゝのと、  
一策は、藍淺く、颯と青に洗上げたのを、ころ／＼  
と三つばかり、お町が取つて、七輪へ載せ、尉を拂  
ひ、火箸であしらひ、媚かしい端折のまゝ、懐紙で  
煽ぐのに、手巾で軽く髪を艶を庇つたので、ほんの  
りと珊瑚の透くのが、三杯目の硝子盃に透いて、あ  
の、唇だか、その珊瑚だか、花だか、蕾だか、蕩然  
となる。

「町子嬢、町子嬢。」

「は。」

と頸の白さを、滑かに、長く、傾いて一寸嬌態を  
行る。

「氣取つたな。」

「はあ。」

「一體こりや何ういふ事になるんだい。」

「慈姑の田樂、ほゝゝ。」  
と、簪の珊瑚と、唇が、霞の中に、慈姑とは別に  
二つ動いて、

「をぢさんは、小児の時、お寺へ小僧さんにやられる處だつたんだつて……何も悪たれ坊ツてわけぢやない、賢くつて、おとなしかつたから。」

「さうすりや屹と名僧知識になれたんだ。」

「お母さんが然ういつて話すんだわ。」

「悪かつたよ。其の方がよかつたんだよ。相濟まなかつたよ。」

今度は、がば／＼と手酌で注ぐ。

「ほゝゝゝ、其の所爲だか、精進男で、慈姑の焼いたのが大好きで、よく内へ来て頼張つたんだつて……お母さんたら。」

「あゝ、情ない。慈姑とは何事です。おなじ發心をしたにしても、これが鱈だと引導を渡す處だが、これぢや、お念佛を唱へるばかりだ。――あゝ、お町ちゃん。」

故とした歎息を、陽氣に、ふツと吹いて、

「……然ういへば、一昨日の晩……」

途中で泊つた、鹿落の温泉でね。」

「え。」

「實際、お念佛を唱へたよ、眞夜半さ。」

「夜半。」

と七輪の上で、火の氣に賑かな頬が肅然と沈んだ。

「……何、考へて見れば、くだらない事な

んだが、鹿落は寂しい處だよ。其處を狙つたわけで

もないが、來がけに一晩保養をしたがね。眞北の海

に向つて山の中腹にあるんだから、長い板廊下を九

十九折と云つた形に通るんだ。——知つて居る

かも知れないが。——座敷は三階だつたけれど、

下からは四階ぐらゐに當るだらう。晩飯の烏賊と蝦

は結構だつたし、赤蜻蛉に海の夕霧で、景色もよか

つたが、もう時節で、しん／＼と夜の寒さが身に沁

みる。あすこいら一帯に、袖のない夜具だから、四

布の綿の厚いのがごつ／＼重くつて、肩がぞく／＼

する。枕許へ熱爛を貰つて、硝子盃酒の勢で、それ

でもぐつすり疲れて寝た。さあ何時頃だつたらう。

何しろ眞夜半だ。廁へ行くのに、裏階子を下りると、これが、頑丈な事は、巨巖を研開いたやうです。下りると、片側に座敷五つばかり並んで、向うの端だけ客が泊つたらしい。處が、次の間つきで、奥だけ幽にともれて居て、あとが暗い。一方が洗面所で、傍に大きな石の手水鉢がある、跣んで手を洗ふやうに出来て居て、笕で谿河の水を引くらしい……しよる、しよる、ちやぶりと、これはね、座敷で枕にまで響いたんだが、風の聲も聞こえない。」

「まあ……」

「すぐの、だゞツ廣い、黒い板の間の向うが便所なんだが、其の洗面所に一つ電燈が点いて居る切だから、いとゞさへ夜ふけの山氣に壓されて、薄暗かつたと思つておくれ。」

「可厭あね。」

「止むを得ないよ。……實際なんだから。晩に見た心覚えでは、此の間に、板戸があつて、一枚開いて居たやうに思つたんだが、それが影もなかつた。思ひちがひなんだらう。」

山霧の冷いのが――すぐ外は崖の森だし――  
窓から、隙間から、立て籠むと見えて、薄い霧の  
やうなものが、敷居に立つて、それに木目がありさ  
うに見える。處で、穿いた草履が、笹葉でも踏む心  
地にバサリとする。……暗い中に、三つ並ん  
で居るんです。」

「あの、鹿落。」

と、瞳を凝らした、お町の眉に、その霧が仄にう  
つつた。

「三階の裏階子を下りた處だわね、三つ並んだ。」

「何うかしたかい。」

「どうして……それから。」

お町は聞返して、又息を引いた。

「其の眞中の戸が、パタン……と。」

「あら……」

「いゝえさ、怯かすんぢやあない。其處で、いき  
なり開いたんだと、餘計驚いたらうが――開い  
て居たんだよ。たゞし、開いて居た、其の黒い戸の、  
裏棧に、白いものが一條、うねくと傳つて居る。」

「何處からか、細目に灯が透くのか知ら？・・  
・其の端の、ふわりと薄扁つたい處へ、指が立つて、白く匆ねて、動いたと思ふと、すつと扉が閉つた。招いたやうな形だが、串戯ぢやあない、人が行つたので閉めたのさ。あとで思つても眞個色が白かつた、うつくしい女の手だよ　ー　あ、何うした。」

其の唇が、眉とともに歪んだと思ふと、はらりと薫つて、胸に冷りと、圓鬚の手巾の落ちかゝる、一重だけは隔てたが、お町の兩の手が、咄嗟に外套の袖をしごくばかりに引搦んで、肩と袖で取絶つた。片褸の襦袢が散つて、山茶花のやうにこぼれた。

この身動きに、七輪の慈姑が轉げて、コンと向うへ飛んだ。一個は、こげ目が紫立つて、蛙の之魂のやうに暗い土間に尾さへ曳く。

少時すると、息つぎの麥酒に、色を直して、お町

が蛙かへるの人魂ひとたまの方ほうを自分じぶんで食たべ、至極尋常しごくじんじやうなのは、皮かはを剥はがして、をぢさんに振舞ふるまつたくらみであるから。  
―― 次の話つぎ はなしが、私わたしはじめ、讀者諸君どくしやしよくんも安心あんしんして聞きくことを得うるのである。

一體いつたい、外套氏ぐわいたうしが、この際さい、いまの鹿落かおちの白しろい手てを言出いひだしたのは、決けつして怪談くわいたんがかりに娘むすめを怯おどかすつもりのものではなかつた。近間ちかまではあるし、此處こゝを出でたら、それこそ、ちゝろ鳴なく蟲むしが絲いとを繰くる音ねに紛まぎれる、其その椎樹しひのき――（釣瓶つるべおろし）（小豆あづきとぎ）などいふ怪物ばけものは傳統でんとう的てきにつきものの――樹きの下したを通とほつて見みたかつた。車麩くるまぶの鼠ねずみに怯おびえた様子やうすでは、同行どうかうを否定ひていされさうな形勢けいせいだつた處ところから、  
「お町まちさん、念佛ねんぶつを唱となへるばかり吃驚びつくりした、廁かはやの戸との白しろい手ても、先さきへ入はいつて居ゐた女をんなが、人影ひとかげに急いそいで扉とを閉しめただけの事ことで、何なんでもないのだ。」と、おくれ馳ばせながら、正體しやうたい見みたり枯尾花流かれをばなりうに――續つづいて説明せつめいに及およぶと、澄すんで沈しづんだ眞顔まがほになつて、鹿落かおちの旅館りよくわんの、其その三みつつ並ならんだ眞中まんなかの廁かはやは、取壊とりこはして今いまはない筈はずだ、と言いつて、先手せんてに、もう知しつて居ゐる。

はてな、然ういへば、朝また、ようをたした時は、こゝへ白い手が、と思ふ真中のは、壁が抜けて、無状に壊れて、向うが藪畳みになつて居たのを思出す。……何、昨夜は暗がりで見損つたにして、一向氣にも留めなかつたのに。……

ふと、をぢさんの方が少し寒氣立つて、

「――然ういへば真中のはなかつたよ、……朝になると。……ぢやあ何か仔細があるのかい。」

「をぢさん――それぢや、をぢさんは、幽霊を、見たんですね。」

「幽霊を。」  
「もう私……氣味が悪いの、可厭だなぞつて、そんな押退けるやうなこと言へませんわ。餘り可哀相な方ですもの。それはね、あの、うぐひ（鰯）亭――づつと河上の、川魚料理……ご存じでせう。」

「知つてるとも。――現在、昨日の午餉はあ

すこで食べたよ。閑静で、落着いて、しんみりして  
佳い家だが、そんな幽霊じみた事は些少もなかつた  
ぜ。」

「いゝえ、あすこの、女中さんが、鹿落の温泉で  
なくなつたんです。お藻代さんといふ、しとやかな、  
優しい人でした。・・・をぢさん、其の白い、  
細いのは、其のお藻代さんの手なんですよ。」

「おどかしなさんない。をぢさんを。」と外套  
氏は笑つたが。

「今年餘寒の頃、雪の中を、里見、滋賀の兩  
氏が旅して、新潟の鍋茶屋などと並び稱せらるる、  
この土地、第一流の割烹で一酌し、場所をかへて、  
美人に接した。其の美人たちが、河上の、うぐひ亭  
へお立寄り遊ばしたか、と聞いて、その方が、なほ、  
お土産になりますのに、と言つたさうである。うぐ  
ひ亭の存在を云爾ために、兩家の名を煩はしたに過  
ぎない。兩家は此の篇には、勿論、外套氏と寸毫の  
かゝはりもない。續いて、仙女香、江戸の水のひそ  
みに倣つて、私が廣告を頼まれたのでない事も斷つ

て置きたい。

近頃は風説に立つほど繁昌らしい。この外套氏が、  
故郷に育つ幼い時分には、一度殆ど人氣の絶えるほ  
ど寂れて居た。町の場末から、橋を一つ渡つて、山  
の麓を、五町ばかり川添に、途中、家のない處を行  
くので、雪にはいふまでもなく埋もれる。平屋づく  
りで、数寄な亭構へで、笕の流れ、吹上げの清水、  
藤棚などを景色に、四つ五つ構へてあつて、通ひは  
庭下駄で、おも屋から、其の方は、山の根に。座敷  
は川に向つて居るが、すぐ磧で、水は向う岸を、藍  
に、蒼に流れるのが、もの静かで、一層床しい。籬  
ほどもない低い石垣を根に、一株、大きな柳があつ  
て、幹を斜に磧へ伸びつゝ、枝は八方へ、座敷の、  
どの窓も、廂も、蔽ふばかり見事に靡いて居る。月  
には翡翠の瀧の絲、雪には玉の簾を聯ねよう。

それと、戸前が松原で、抽でた古木もないが、ほ  
どよく、暗くなく、あからさまならず、しつとりと、  
松葉を敷いて、松毬まじりに掻き分けた路も、根を  
畝つて、奥が深い。いつも松露の香が立つやうで、

實際、初茸、しめぢ茸は、此の落葉に生えるのである。入口に萩の枝折戸、屋根なしに網代の扉がついて居る。また松の樹を五株、六株。すぐに石ころ道が白く續いて、飛地のやうな町屋の石を置いた板屋根が、山裾に沈んで見ると、其處に其の橋がある。

蝙蝠に浮かれたり、螢を追つたり、其の昔子供等は、橋まで來るが、夜は、うぐひ亭の川岸は通り得なかつた。外套氏のいふ處では、道の中途ぐらゐ、麓の出張つた低い磧の岸に、むしろがこひの掘立小屋が三つばかり築の崩れたやうなのがあつて、古俳句の——短夜や（何とかして）川手水——  
がそつくり想出された。其處が、野三昧の跡とも、山窩が甘い水を慕つて出て來るともいふ。人の灰やら、犬の骨やら、いづれ不氣味な其の部落を隔てた處に、幽に其の松原が黒く亂れて梟が鳴いて居るお茶屋だつた。——鰻、鮓、鮓の類は格別、亭で名物にする一尺の岩魚は、娘だか、妻女だか、艶色に懸想して、獺が件の柳の根に、鱈ある錦木にするのだと風説した。聊か、あやかしがついて居て、一層寂れた。鵜の脚へた鮎は、殺生ながら賞翫しても、

獺の抱へた岩魚は、色戀と雖も氣味が悪かつたものらしい。

今は、自動車さへ往來をするやうになつて、松蔭の枝折戸まで、つきの女中が、柳なんぞの縞お召、人懐く送つて出て、しとやかな、情のある見送りをする。ちやうど、容子のいゝ中年増が給仕に當つて、確に外套氏がこれは體驗した處である。次手に岩魚の事を言はう。瀬波に翻へる状に、背尾を刎ねた、皿に餘る尺ばかりな鹽焼は、まつたく美味である。其處で、讚歎すると、上流、五里七里の山奥から活のまゝ徒歩で運んで來る、山爺の一人などは、七十を越した、もう五十年餘りの馴染だ、と女中が言つた。して見ると、おなじ獺でも山獺が持參するので、傳説は嘘でない。しかし、お町の――一説では、上流五里七里の山奥から山爺は、――どの客にも言ふのださうである。

水と、柳が所爲だらう。女中は皆美しく見えた。もし、妻女、娘などがあつたら、嘸ぞ妍艶であらうと察しらるゝ。

さて、「行らして、また、おいで遊ばして」  
と枝折戸でいふ一種綿々たる餘韻の松風に傳ふ挨拶  
は、不思議に嫋々として、客は青柳に引戻さるゝ思  
がする。尚ほ一段と餘情のあるのは、日が暮れると、  
竹の柄の小提灯で、松の中の徑を送出すのださうで  
ある。小褌の色が露ににじつて、こぼれ松葉へ映るの  
は、どんなにか媚かしからうと思ふ。

「――お藻代さんの時が、やつぱりさうだつ  
たんですつてさ。それに、もう十時すぎだつたとい  
ふんです。」

五年前、六月六日の夜であつた。明直にいへば、  
それが、うぐひ亭のお藻代が、白い手の幻影になる  
首途であつた。

其の夜、松の中を小提灯で送り出た、中京、名古屋  
の一客――畜生め色男――は、枝折戸口  
で別れるのに、戀々としてお藻代を強ひて、東の新  
地――廓の待合、明保野と言ふ、即ちお町の家  
まで送つて來させた。お藻代は、はじめから、お町

の内に馴染ではあつたが、それが更めて深い因縁になつたのである。

「あの提灯が寂しいんですわ……考へて見ますと……雑で、白張のやうなんですもの。」

――

「うぐひ。」  
「――と一面――」  
「亭」  
が、まはしがきの裏にある。處が、振向け方で、「うぐひ」だけ黒く浮いて出ると、お經ではない、あの何とか、梵字とかのやうで、卵塔場の新墓に灯れて居さうに見えるから、だと解く。――この、お町の形象學は、何うも三世相の鼈頭にありさうで、承服しにくい。

それを、然も松の枝に引掛けて、――名古屋の客が待つて居た。冥途の首途を導くやうぢやありませんか、五月闇に、其の白提灯を、ぼつと松林の中に、と云ふ。……成程、もの寂しさは、も

## の寂しい

話は一寸前後した。うぐひ亭では、座つきに月雪花。また少々慾張つて、米俵だの、丁子だの、然うした形の落雁を出す。一枚づつ、女の名が書いてある。場所として最も近い東の廓のおもだつた藝妓連が引札がはりに寄進につくのださうで。勿論、かけ離れては居るが、呼べば、どの妓も三味線に應ずると言ふ。其の五年前、六月六日の夜。名古屋の客は。註しておくが、その晩以来、顔馴染にもなり、音信もするけれども、其の姓名だけは。とお町が堅く言はないのださうであるから、たゞ名古屋の客として。あとを續けよう。

「……みんな、いゝ女らしいね。見た處中でも、俵のなぞは嬉しいよ。こゝに雪形に、もよ、といふのは。」

「飛んだ、おそまつでございます。」  
「と  
と白い手と一所に、銚子がしなふやうに見えて、

水色の手絡の圓鬚が重さうに俯向いた。―― 搦  
かな女だといふから、其の容子は想像に難くない。  
欄干に青柳の枝垂るゝ裡に、例の一尺の岩魚。鰻と  
蓴菜の酢味噌。胡桃と、飴煮の鮓の鉢、鮓とせん牛  
蒡の椀なんど、膳を前にした光景が目前にあ  
る。……

「これだけは、密と取りのけて、お客様には、お  
目に掛けませんのに、どうして交つて居たのでござ  
いませうね。」――

「いや、何うも其の時の容子と云つたら。――  
名古屋の客は、あとで、廓の明保野で―― 落  
雁で馴染の藝妓を二三人一座に―― 然う言つて、  
燥ぎもしたのださうで。」

落雁を寄進の藝妓連が、……女中頭ではあ  
るし、披露めのためなんだから、美しくて婀娜なお  
藻代の名だけは、なか間の先頭にかき込んで置くの  
であつた。

―― 断るまでもないが、昨日の外套氏の時の落雁には、もはやお藻代の名だけはなかつた。――

さて、至極古風な、字のよく讀めない勘定がきの受取が済んで、其のうぐひ提灯で送つて出ると、折戸を前にして、名古屋の客が動かなく成つた。落雁の藝妓を呼びに廓へ行く。是非送れ、お藻代さん。．．．．．一見は利かずとも、電話で言込めば、と云つても、威勢よく酒の機嫌で承知をしない。而して、袖だけの松の樹のやうに動かない。そんな事で、誘はれるやうな婦ではなかつたのに、何ういふ縁か、それでは、おかみさんに聞いて許しを得て。．．．．．で、おも屋に引返したあとを、お町がいふ處の、墓所の白張のやうな提灯を枝にかけて、しばらく待つた。其の薄い灯で、今度は、葦が化した状で、帽子を仰向けに踞んで居て待つ。

やがて、出て来た時、お藻代は薄化粧をして、長襦袢を着換へて居た。

其の長襦袢で ．．．．． 明保野で寝たのであ

るが、朱鷺色の薄いのに雪輪を白く抜いた友染である。徑に、ちら／＼と、この友染が、小提灯で、川風が水に添ひ、野茨、卯の花。且つちり亂るゝ、山裾の草にほのめいた時は、向瀬の流れも、低い磧の撫子を越して、駒下駄に寄つたらう。．．．

風が、どつと吹いて、蓮根市の土間は廂下りに五月闇のやうに暗く成つた。一雨来よう。組合はせた五百羅漢の腕が動いて、二人を抱込みさうである。

何うも話が及腰に成る。二人で其の形に、並んで立つて貰ひたい。其の形、．．．其の姿で。．．．お町さんとかも、袂端折をおろさずに。．．．お藻代も、道芝の露に裳を引揚げたと  
言ふのであるから。

一體黒い外套氏が、いゝ年をした癖に、悪く色氣があつて、今しがた明保野の娘が、お藻代の白い手に怯えて取絶つた時は、内々で、一抱き柔かな胸を抱込んだらう。．．．ばかりでない。はじめ、

連立つて、此處へ庭樹の多い士族町を通る間に――  
其昔、江戸護持院ヶ原の野佛だつた地藏様が、負  
はれて行かう……と朧夜にニコリと笑つて申  
されたを、通りがかつた當藩三百石、究竟の勇士が、  
其のまゝ中仙道北陸道を負ひ通して歸國した、と言  
傳へて、その負さりたまうた腹部の中窪みな、御丈、  
丈餘の地藏尊を、古邸の門内に安置して、花筒に花、  
手水鉢に柄杓を備へたのを、お町が手つぎに案内す  
ると、外套氏が懐しさうに挿んだのを、嬉しがつて、  
感心して、こん度は切殺された、城のお妾さん――  
の其の姿で、縁切り神さんが、向うの森の祠にあ  
るから一所に行かうと、輿に乗じた時……何  
といった、外套氏。――「縁切り神様は、い  
やだよ、二人して。――は、苦々しい。」

だから、一寸此の子を恚う借りた工合に、こゝで  
道行きの道具がはりに使はれても、憾みはあるまい。

其處で川通りを、次第に――然う／＼然う肩  
を合はせて歩行いたとして――橋は渡らずに屋  
敷町の土堀を三曲りばかり。お山の妙見堂の下を、

たちま あか 忽ち明るい廓へ入つて、然も小提灯のまゝ、客の好  
みの酔興な、燈籠の繪のやうに、明保野の入口へ  
―― 其處で、うぐひの灯が消えた。

「―― 藤紫の半襟が少しはだけて、裏を見せ  
て、織り肌襦袢の眞紅なのが、縁の絲とかの、燃え  
るやうに、ちら／＼して、靜に瞼を合はせて居た、  
お藻代さんの肌の白いこと。……六疊は立籠  
めてあるし、南風氣で、其の上暖か過ぎたでせう。  
鬢の毛がねつとりと、あの氣味の悪いほど、枕に伸  
びた、長い、ふつくりしたのどへまつはつて、それ  
で居て、色が薄りと蒼いんですつて。……友  
染の夜具に、裾は消えるやうに細りしても――  
寝亂れよ、をぢさん、家業で藝妓衆のなんか馴れて  
居ても、女中だつて堅い素人なんでせう。名古屋の  
客に呼ばれて……。お信――えゝ、さつき  
私たちが出しなに駒下駄を揃へた、あの银杏返の、内  
のあの女中ですわ――二階廊下を通りがかりに  
ね、（おい、ねえさんか、湯を一杯。）……  
（お水を取かへて参りませうか。） 枕頭にあるん

ですから。（いや、熱い湯だ。時々こんな事がある。飲過ぎたと見えて寒気がする。）  
これが襖越しのやりとりよ。

「私？私？私？私は毎朝のやうに、お山の妙見様へお参りに。おつかさんは、まだ寢床に居たんです。臺所の薬罐にぐら／＼沸つたのを、銀の湯沸に移して、塗盆で持つて上つて、（御免遊ばせ。）中庭の青葉が、緑の霞に光つて、さし込む裡に、いまの、其の姿でせう。――馴れない人だから、帯も、扱帯も、羽衣でも雀つたやうに、ひき亂れて、それも男の手で脱がされたのが分ります。――薄い朱鷺色、雪輪なんですもの、何處が乳だか、長襦袢だか。――六疊だし。――お藻代さんの顔の前、枕まではゆきにくい。お信が、ぽうと成つて、入口に立ちますとね、（其處へ。）  
と名古屋の客がおつしやる。……それなりに敷蒲團の裾へ置いて来たさうですが。」

外套氏は肩をすくめた。思はず危険を豫感した。

「名古屋の客が起上りしな、手を伸ばして、盆ごと取つて、枕頭へ宙を引くトタンに塗盆をこつたんです。まるで、黒雲の中から白い猪が火を噴いて飛菟る勢で、お藻代さんの、恍惚した其の寝顔へ、蓋も飛んで、仰向けに、熱湯が、血ですか、蒼い鬼火でせうか、玉をやけば紫でせうか……ぱつと煮えた湯気が立つたでせう。……お藻代さんは、地獄の釜で煮られたんです。」

あの、美しい、鼻も口も、其ツ切、人には見せず……私たちも見られません。」

「野郎は何うした。」  
と外套氏の膝の拳が上つた。

「それはね、ですが、納得づくです。すつかり身支度をして、客は二階から下りて来て——長火鉢の前へ起きて出た、うちの母の前へ、きちんと膝に手をついて、（——一寸事件が起りました。女は承知です。すぐ歸りますから。）——

分外なお金子に添へて、立派な名刺を——こ

それは極秘に、と云つてお出しなすつたさうですが、  
すぐ式臺へ出なさいますから、（一寸何うぞ、旦那。）  
と引留めて置いて、まだ顔も洗はなかつた  
さうですけれど、トン／＼と、二階へ上つて、大急  
ぎで廊下を廻つて、襖の外から、

（――夫人さん――）

ひっそりして居たさうです。

（――夫人さん、旦那様はお歸りになります  
が。）

――ものに包まれたやうな、ふくみ聲で、  
（いらして、またおいであそばして……）

――と、震へて、きれ／＼に聞こえたつて言ひます。

をぢさん、妙見様から、私が歸りました時はね、  
もう病院へ、母がついて、自動車で行つたあとです。  
お信たちのいふのでは、玉子色の絹の手巾で顔を隠  
した、其の手巾が、もう附着いて居て離れないんで  
すつて。……帯をしめるのにも。さうして手  
巾に（もよ）と紅糸で端縫をしたのが、苦痛に

ゆがめて嚙緊める唇が映つて透くやうで、涙は雪が溶けるやうに、頸脚へまで落ちたと言ひます。」

「不可い……」

外套氏は、お町の顔に當てた手巾を慌しく手で拂つた。

雨が激しく降つて來た。

「……何とも申様がない……併し、其處で鹿落の温泉へは、療治に行つたともいふわけかね。」

「湯治だなんのつて、そんな怪我ではないのです。療治は疾うに濟んだんですが、何しろ大變な火傷でせう。づつと親もとへ引込んで居たんですが、片親です、おふくるばかり——外へも出ません。私たちが行つて逢ふ時も、目だけは無事だつたさうですけれども、すみの目金をかけて、姉さんかぶりをして、口にはマスクを掛けて、御經を習つて居ました。お客から、つけ届けはちやんとありますが、一度來るといつて、一年たち三年たち、……尤も、沸湯を浴びた、其の時、（——男を一人

助けて下さい。……見継ぎは、一生する。）  
—— 両手をついて、言つたんですつて。

お藻代さんは、たゞ一夜の情で、死んだつもりで、  
地獄の釜で頷いたんですね。ですから、客の方で約  
束は違へないんですが、一生飼殺し、といった様子  
でせう。

旅行は何うしてしたでせう。鹿落の方角です、察  
しられますわ。霜月でした。—— 夜汽車はすいて  
居ますし、突伏してでも居れば、誰にも顔は見られ  
ませんの。

温泉宿でも、夜汽車でついて、すぐ、其の夜半だ  
つたんですつて。—— 何處でもいふことでせう  
か知ら？ 三つ並んだはゞかりの真中へは入るもの  
ではないとは知つて居たけれども、誰も入るもの  
ないのを、却つて、たよりにして、夜ふけだし、其  
處へ入つて……情ないわけねえ。……  
鬱陶しい目金も、マスクも、漸と取つて、はゞかり  
の中ですよ。—— それで吻として、大な階子段

の暗いのも、巖山を視めるやうに珍らしく、手水鉢に算のかゝつた景色なぞ……」

「あゝ、然うか。」

「うぐひ亭の庭も一所に、川も、山も、何年ぶりか、久しぶりで見る氣がして、湯ざめで冷くなるまで、覗いたり、見廻したり、可哀相ぢやありませんか。」

「ー かきおきにあつたんですー  
ハツと手をのばして、戸を内へ閉めました。不意に人が來たんですね。ー それが細い白い手よ。」

「むゝ、私のやうな奴だ。」

と寂しく笑ひつゝ、毛肌になつて悚とした。

「ぎやつと云つて、其の男が、凄じい音で顛動返つて了つたんですつてね。……夜番は驅けつけますわ、人は騒ぐ。氣の毒さも、面目なさも通越して、ひけめのあるのは大火傷の顔のお化でせう。」

もう身も世も断念めて、すぐに死場所の、・・・

・鐵道線路へ・・・

「厠からすぐだらうか。」

「さあね、それがね、恥かしさと死ぬ氣の、一念で、突き破つたんでせうか。細い身體なら抜けられるくらい古壁は落ちて居たさうですけれど、手も淨めずに出たなんぞつて、そんなのは、お藻代さんの身にとつて私は可厭。・・・それだと何處で遺書が出来ます。――轢かれたのは、やつと夜の白みかゝつた時だつていふんですもの。尤も（幽なお月様の影をたよりに）然うかいてもあるんですけれども。一旦座敷へ歸つたんです。一生懸命、一大事、何かの時、魂も心も消えるといへば、姿だつて、消えますわ。――三枚目の大男の目をまはして居るまはりへ集まつた連中の前は、霧のやうに、スツと通つて、悠然と算で手水をしたでせう。」

「もの凄いい。」

「でも、分らないのは、――新聞にも出ましたけれど、ちやんと裙腰のたしなみはしてあるのに、衣ものは、肌まで通つて、ぐつしより、ずぶ濡れだ

つたんですつて。．．．．水ごりでも取りましたか、それとも途中の小川へでも落ちたんでせうか。」

「あゝ、縁臺が濡れる。」

と、お町の手を取つて、位置を直して、慎重に言つた。

「それにね、首．．．．顔がないんです。あの、冷いほど、眞白な、乳も、腰も、手足も残して。．．．．微塵に轢かれたんでせう。血の池で、白魚が湧いたやうに、お藻代さんの、顔だの、頬だのが。」

堤防を離れた、電信のはりがねの上の、あの邊．．．．崖の中途の椎の枝に、飛上つた黒髪が――根をくる／＼と巻いて、倒に眞黒な小蓑を掛けたやうになつて、それでも、優しい人ですから、すんなりと朝露に濡れて居ました。それで居て毛筋をつたはつて、落ちる雫が下へ溜つて、血だつたさうです。」

「寒くなつた。……出ようぢやないか。」

「あゝ西日が當ると思つたら、向うの蕃椒か。慌てて居る。が雨は霽つた。」

提灯なしに　二人は、歩行き出した。お町の顔の利くことは、いつの間にか、蓮根の中へ寄掛けて、傘が二本立掛けてあるのを振返つて見たので知れる。

「……彼處に人が一人立つて居るね、縁臺を少し離れて、手摺に寄掛つて。」

「えゝ、どしや降りの時、氣がつかましたわ。私をぢさんの影法師かと思つたわ。――まだ麥酒があつたでせう。あとで一口めしあがるなぞは、洒落てるわね。」

「何だ、いま泣いた烏がもう出て笑ふ、といふのは、もう些と殊勝な、お人柄の事なんだぜ。私はまた、何故だか、前刻いつた　――八田　――紺屋の干場の近くに家のあつた、其の男のやうな氣がしたよ。小學校以來。それだつて空な事過ぎるが、むかし懐かしさに、此處いら歩行かないとは限らない。」

―― 女づれだから、一寸言を掛けかねたらう。

それだと、彼處で一杯やりかねない男だが、もう些と入組んだ事がある。―― 鹿落を日暮方出て此地へ来る夜汽車の中で、目の光る、陰気な若い人が眞向に居てね。私と向ひ合ふと、立掛けてあつた鐵砲―― あれは何とかいふ獵銃さ―― それを縦に取つて、眞鍮の蓋を、コツコツ開けたり、はめたりする。長い髪の毛を一振りながら、（獵師と見えますか。）ニヤリと笑つて、（フン、世を忍ぶ―― 假装ですよ。）と云つてね。袋から、血だらけな頬白を、（受取つてくれたまへ。）―― 然ういつて、今度は銃を横に向けて撃鐵をガチンと掛けるんだ。（麁葉だが、いかゞです。）―― 貰ひものぢやあるが葉巻を出すと、目を見据ゑて、（贅澤なものをやりますな、僕は、主義として、然ういふものは用ゐないです。）また然ういつて、撃鐵をカチツと行る。

貰ひものの葉巻を吹くかすより、霰弾で鳥をばら

す方が、餘程贅澤ぢやないか、と思つたけれど、何  
しろ、木胴鐵胴からくり胴鳴つて通る飛團子、と一  
所に、隧道を幾つも抜けるんだからね。要するに仲  
藏以前の定九郎だらう。

其處で、小鳥の回向料を包んだのさ。

十時四十分頃、二つさきの山の中の停車場へ下り  
た。が、別れしなに、袂から名札を出して、寄越さ  
うとして、また目を光らして引込めて了つた。

「小鳥は此羅のやうなものに包んでくれた。

此羅は裂いて汽車の窓から「小鳥は「

包み直して宿へ着いてから裏の川へ流した。が、眼  
張魚は、驀だと諺に言ふから、血の頬白は、鰯にな  
らうよ。「其の男のだね、名刺に、用のあり  
さうな人物が、何となく、立つて居たんぢやないか  
とも思つたよ。」

「家業がら了解は早い。」

「其の向の方なら、大概私が顔見知りよ。・・・」

・いゝえ、盗賊や風俗の方ばかりぢやありません。  
「

「いや、大きに――それぢや違つたら

う。．．．安心した。――時に．．．

實は椎の樹を通つて貰はうと思つたが、お藻代さんの話のいまだ。今度にしようか。」

「えゝ、どちらでも。．．．ですが、もう此の軒を一つ廻つた塀外が、ぢき其の椎の樹ですよ。

棟に蔭がさすでせう。路地の暗いのも其の所爲です

わ。

「大きな店らしいのに、寂寞して居る。何屋だら

う。

「有名な、湯葉屋です。」

「湯葉屋――坊主になり損つた奴の、慈姑と一所に、大好きなものだよ。豆府の湯へ箱形の波を打つて、皮が伸びて浮く處をすくひ上げる。よく、東の市場で覗いたつけ。．．．あれは、面白

い。

「入つて見ませう。」

「障子は開いて居る。――は、あ、大きな湯の字か。こん度は映畫と間違へなかつた。しかし、誰も居ないが、……可いかい。」

「何かいつたら、挨拶をしますわ。一寸參觀に、何といひませう、――見學に、ほ、ほ。」

掃清めた廣い土間に、惜い哉、火の氣がなくて、たゞ冷たい室だつた。妙に、日の靜寂間だつたと見えて、人の影もない。窓の並んだ形が、椅子をかたづけた學校に似て居たが、一列に續いて、雑と十臺、曲尺に隅を取つて、また五つばかり銅の角鍋が並んで、中に液體だけは湛へたのに、青桐の葉が枯れつゝ映つて居た。月も十五に影を宿すであらう。出ようとすると、向うの端から、ちら／＼と點いて、次第に竈に火が廻つた。電氣か、瓦斯を使ふのか、殆ど五彩である。ぱつと燃えはじめた。

此の火が、一度に廻ると、カアテンを下ろしたやうに、窓が黒くなつて、をかきな事には、立つて居る土間にひだを打つて、皺が出来て、濡色に光澤が出た。

お町が、しつかりと手を取つた。

背後から、

「失禮ですが、貴方……」

前刻の蓮根市の影法師が、旅装で、白哲の紳士になり、且つ指環を、竈の火に彩られて顯はれた。

「おゝ、これは。」

名古屋に時めく大資産家の婿君で、某學校の教授と、人の知る……即ち、以前、此の蓮池邸の坊ちやんであつた。

「見覚えがとおりでせう。」

と斜に向つて、お町にいつた。

「まあ。」

時めく婿は、帽子を手にして、

「後刻、お伺ひする處でした。」 驚破す、再び、

うぐひ亭の當夜の嫖客は—— 渠であつた。

三人のめぐりあひ。しかし結末にはならない。おなじ廓へ、第一歩、三人のつまさきが六つに入交つた時である。

落葉おちばのそよぐほどの、跫音あしおともなしに、曲尺かねじやくの角かどを、此この工場こうばから住居すまひへ續つゞくらしい、細長ほそながい、暗くらい土間どまから、白髪しろがみがすく／＼と生はえた、八十はちを越こえよう、目口めくちも褐漆かつしつに干ひからびた、脊せの低ひくい、小ちひさな媪ばあさんが、繼つぎはぎの厚あつい布子ぬのこで、腰こしを屈かめて出でて來きた。

蒼白まつさをになつて、お町まちがあとへ引ひいた。

「お姥ばあさん、見物けんぶつをして居ゐますよ。」

と鷹揚おつやうに、先代せんだいの邸主やしきぬしは落おとついで言いつた。

何なんと、媪ばあは頤あごをしゃくつて、指ゆび二ふたつで、目めを弾はじいて、じろりと見み上げたではないか。

「無斷むだんで、いけませんでしたかね。」

外套くわいたうし氏は、やゝ妖變えうへんを感じかんながら、丁寧ていねいに云いつたのである。

「どうなとせ。」

唾つばと泡あわが嚙合かみあふやうに、ぶつ／＼と一言ひとこといつたが、ふ、ふふん、と鼻はなの音おとをさせて、膝ひざの下したへ組手くみてのまゝ、腰こしを振ふつて、さあ、たしか鍋なべの列れつの丁ちやうど土間どまへ曲角まがりかどの、火ひの氣けの赫かつと強つよい、其その鍋なべの前まへへ立たつと、しやんと伸のびて、肱ひぢを張はり、湯氣ゆげのむら／＼と立たつ中なかへ、いきなり、くしや／＼の顔かほを突つ込んだ。

が、ばつと音を立てて引抜いた灰汁の面と、べとりと眞黄色に附着いた、豆腐の皮と、どつちの皺ぞ！  
這つたやうに、低く踞んで、その湯葉の、長い顔を、目鼻もなしに、ぬつと擡げた。

口のあたりが、びくりと動き、苔の青い舌を長く吐いて、見よ見よ、べろ／＼と舐め下ると、湯葉は、ずり下り、めくれ下り、黒い目金と、耳までのマスクで、口が開いた、其の白い顔は、湯葉一枚を二倍にして、土間の眞中に大きい。

同時に、蛇のやうに、再び舌が敵つて舐め廻すと、ぐしゃ／＼と顔一面、山女を潰して眞赤になつた。

お町の肩を、両手で緊乎として居て、一つ所に固つた、我が足がよるめいて、自分がドシンと倒れたかと思ふ。名古屋の客は、前のめりに、近く、第一の銅鍋の沸上つた中へ面を捺して突伏した。

「あッ。」

片手で袖を握んだ時、布子の裾のこはばつた尖端がくるりと刎ねて、媪の尻が片隅へ暗くかくれた。

竈の火は、炎を潜めて、一時に皆消えた。

同時に、雨が又迫るやうに、窓の黒さが風に動いて、装り上つたやうに見透かさるゝ市街に、暮早き電燈の影があかく立つて、銅の鍋は一つ一つ、稻妻に似てびか／＼と光つた。

足許も定まらない。土間の皺が裂けるかと思ふ時、ひいても離れなかつた名古屋の客の顔が、湯氣を飛ばして、辛うじて上るとともに、ぴち／＼と魚の如く、手足を刎ねて、どつと倒れた。兩腋を抱いて、抱起した、その色は、火の皮の膨れた上に、爛が紫の皺を、波打つて、動いたのである。

市のあたりの人聲、此の時賑かに、古椎の梢の、ざわ／＼と鳴る風の腥葷さ。

ー 病院は、故らに、お藻代の時とちがつた、他のを選んだ。

生命に仔細はない。

男だ。容色なんぞは何でもあるまい。

たゞお町の繰り言に聞いても、お藻代の遺書にさへ、黒髪のおくれ毛ばかりも、怨恨は水莖のあとに留めなかつたといふのに。――

現代　――　或意味に於て　――　めぐる因果の小車などといふ事は、天井裏の車麩を鼠が傳ふぐらゐなものであらう。

待て、それとても不氣味でない事はない。

魔は　――　鬼神は　――　あると見える。

附言。

今年、四月八日、灌佛會に、お向うの遠藤さんと、家内と一所に、麹町六丁目、擬寶珠屋根に桃の影さす、眞寶寺の花御堂に詣でた。寺内に閻魔堂がある。遠藤さんが扉を覗いて、袖で拜んで、

「お釋迦様と、お閻魔さんとは、何ういふ關係があるんでせう。」

唯今、七彩五色の花御堂に香水を奉仕した、この

三十歳の、龍女の、深甚微妙なる聽問には弱つた。  
要品を讀誦する程度の智識では、説教も濟度も覺束  
ない。

「いづれ、それは……其の、如是我聞とい  
ふ處ですがね。と時に、見附を出て、美住古（鮫  
屋）は如何です。」

「いや。」

「これは御挨拶。」

いきな坊主の還俗したのでもないものが、こはだ  
の鮫を賣るんだから、ツンとして、愛想のないのに  
無理はない。

「朝飯を濟ましたばかりなのよ。」

午後三時半である。きゝたまへ。

「其處を見込んで誘ひましたよ。」

「私もさうだらうと思つてさ。」

大通りを少しあるくと、向うから、羽織の袖で風  
呂敷づつみを抱いた、脊のすらりとした櫛巻の女が、  
もの靜に來かゝつて、うつむいて、通過ぎた。

「いゝ女ね。見ましたか。」

「まつたく。」

「しつとりした、いゝ容子ね、目許に恐ろしく情のある、口許の優しい、少し寂しい。」

三人とも振り返ると、町並樹の影に、其の頸許が白く、肩が竄れて居た。

豫て、外套氏から聞いた、お藻代の俤に直面した気がしたのである。

路地うちに、子供たちの太鼓の音が賑はしい。入つて見ると、裏道の角に、稻荷神の祠があつて、幟が立つて居る。恰も舊の初午の前日で、まだ人出がない。地口行燈が彼方此方に晝の影を浮かせて、飴屋、おでん屋の出たのが、再び、氣のせぬか、談話中の市場を髣髴した。

縦通りを真直ぐに、中六を突切つて、左へ――  
女子學院の塀に添つて、あれから、歸宅の途を、再び中六へ向つて、順に引返すと、又向うから、容子といひ、顔立もおなじやうな――これは島田

鬚の娘さんであつた。――十八九のが行違つた。

「そつくりね。」

「氣味が悪いやうですね。」

と家内も云つた。少し遠慮して、間を置いて、三人で齊しく振返ると、一脈の紅塵、軽く花片を乗せながら、うしろ姿が送つて行く。……其の娘も、町の三辻の處で見返つた。春闌に、番町の櫻は、静である。

家へ歸つて、摩耶夫人の影像。――これだと速に説教が出来る、先刻の、花御堂の、あかちゃんの御母ぎみ。――頂餅と華をさゝげたのに、香をたいて、それから記しはじめた。

【完】